



## 太原の妓女の詩と欧陽詹

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00005124">https://doi.org/10.32150/00005124</a>

## 太原の妓女の詩と欧陽詹

後藤秋正

とにしたい。

二

まず叙述の都合上、『全唐詩』所載の当該作品の題辭と太原の妓女の詩を引いておこう。

拙稿「臨終詩の成立とその展開」（『鎌田正博士八十寿記念漢文学論集』大修館書店、一九九一。その後、『中国中世の哀傷文学』研文出版、一九九八に収録）において、唐代の臨終詩を取り上げたことがある。その際に、太原の妓女の「寄欧陽詹」と題する詩（『全唐詩』卷八〇二、『唐詩紀事』卷三五）には臨終詩の要素はあるものの、検討の対象からは除外した。その理由については拙稿の注で、以下のように述べておいた。

この詩には、欧陽詹（七八九―？）<sup>1</sup>が太原の妓女と都での再会を約して別れたのち、妓女の思ひはつづつ病み、愛情の証の詩を作って「筆を折って逝」ったという作詩の背景にまつわる逸話がある。ところが詹が形見の函を開くと「一たび働して卒」したとあるなど、逸話自体に創作的色彩が濃いので取り上げなかった。

しかしながら、その後、孟簡の「詠欧陽行周事并序」が、この経緯を述べ、詩に詠じていることを知った。そこで、改めて関連する種々の資料を検討し、太原の妓女の「詩」が制作されるに至った背景について考えてみるこ

欧陽詹遊太原、悦一妓、約至都相迎。別後妓思之疾甚。乃刃髻作詩、寄詹、絶筆而逝。詩一首。

欧陽詹 太原に遊び、一妓を悦び、都に至りて相い迎えんことを約す。別後 妓 之を思ひて疾むこと甚し。乃ち髻を刃り詩を作りて、詹に寄せ、筆を絶ちて逝く。詩一首。

自從別後減容光 別後 容光を減じて自從り

半是思郎半恨郎 半ばは思郎を思ひ半ば郎を恨む

欲識旧来雲髻様 旧来の雲髻の様を識らんと欲せば

為奴開取縷金箱 奴の為に開取せよ縷金の箱

詩中に特に難解な語はない。ただ、「容光」はすがたかたちの美しさであ

り、徐幹「室思」詩に、

端座而無為 端座して為す無し  
 髣髴君容光 髣髴たり君の容光

とあるのを踏まえている。「雲髻」は雲のように高く結いあげたもとどりであつて、曹植「洛神賦」に、

雲髻峩峩 雲髻 峩峩として  
 脩眉聯娟 脩眉 聯娟たり

と見えるのを典拠とするであろう。また、「奴」は妓女の自称。「縷金の箱」は、金糸で飾った、もしくは美しい彫刻を施したはこ。妓女の愛用の品である。転・結句は、瘦せ衰えた私の命は長くはないので、もしあなたが私のことを覚えていて、以前のもどりの様子を知らいたいと思うのなら、私の愛用の箱を手にとつて開け、中に収められている遺髪を見て私のことを思い出してほしい、というのである。この詩は近年の注釈書類にも収録されている。管見に入ったものをいくつか挙げれば、まず蘇者聰選注『古代婦女詩一百首』（岳麓書社、一九八四）は、次のように述べている。

此詩反映古代妓女熱烈追求愛情而不可得的痛苦。末兩句永訣之言至為沈痛。

また、張明葉編著『中国歴代婦女詩詞選』（遼寧教育出版社、一九八九）は、以下のように述べている。

這是一首殉情的絕命詩、其中有思、有怨、更有強烈的愛、蘊蓄着十分真

摯而複雜的感情。它生動地反映了古代下層婦女的悲慘命運和崇高品格。

前者は比較的穩当な指摘と考えられるが、後者が言うように、この詩が果たして「情に殉じた」妓女の「崇高な品格」を生き生きと反映した「絶命詩」であるかどうかについては、検討を要するであろう。さらに、沈立東・葛汝桐主編『歴代婦女詩詞鑑賞辞典』（中国婦女出版社、一九九二）この項の執筆は陳新栄）は、いつそう踏みこんで次のように言う。

讀完這首詩、一個古代痴情女子的形象躍然紙上。……別離、無疑給她留下了綿綿無絕期的思念和終身的遺憾。在短短的四句詩裏、作者那如泣如訴、愛恨交加的心声淋漓盡致地表達了出來。……這首絕命詩、飽蘸了生活在最低層婦女的血和淚。……作者雖与欧陽相識相恋、最終還是沒有逃脫那個社會帶給她的被玩弄被拋棄的命運、以致憂鬱思念成疾、含恨而亡。

この発言は、社会の最下層に位置すると認識されていた妓女<sup>③</sup>の苦痛を特に強調しているが、彼女が恨みを含んで病死する前の「絶命詩」であると認められている点は前二者と共通している。

### 三

欧陽詹と太原の妓女にまつわる逸話が初めて見える資料は、孟簡（？—八一三）の「詠欧陽行周事并序」（『全唐詩』卷四七三）であると考えられる。ただし、これには妓女の「詩」は見られない。

孟簡の伝は『新唐書』卷百六十と『旧唐書』卷百六十三にあつて、若干の異同がある。ひとまず後者によれば、孟簡、字は幾道は、平昌（山東省臨邑県の東北）の人。進士科、ついで宏辞（詞）科に登第、倉部員外郎、司封郎中などを経て、元和四年（八〇九）には諫議大夫となり、六年には「大乘本

生心地観経」を漢訳している。ついで常州（江蘇省常州市）刺史となり、八年には金紫光祿大夫を加えられ、さらに給事中となった。その翌年には越州（浙江省紹興市）刺史となり、御史中丞・浙東觀察使を兼ねている。その後も官位は順調に進み、戸部侍郎、襄州（湖北省襄樊市）刺史・山南東道節度使を経て、十四年には、改めて太子賓客を授けられ、東都洛陽に分司している。ところが十五年に穆宗が即位すると、吉州司馬員外置同正員に貶謫される。襄州刺史在任中に、彼の意に従わなかった部下を土囊で圧殺したこと、さらには収賄事件が発覚したことが原因である。しかし、翌長慶元年（八二一）には大赦に遇つて、睦州（浙江省淳安县）刺史に量移され、再び常州刺史となつて、三年には太子賓客分司に復した。この年の十二月に卒している。『旧唐書』は孟簡の性格について、次のように言っている。

簡性俊拔尚義、早歲交友先沒者、視其孤、每厚於周恤、議者以為有前輩風。然溺於浮囂之教、為儒曹所誚。

簡性は俊抜にして義を尚び、早歳に交友して先に没せし者は、其の孤を視れば、毎に周恤に厚し、議する者以て前輩の風有りと為す。然るに浮囂の教えに溺れ、儒曹の誚る所と為る。

これによれば、彼は仏教に過度に傾倒していたものの、知友の遺族の困窮ぶりを無視できないという仁義に篤い一面をもっていたようだ。彼がなぜ歐陽脩の事跡に関心を抱いたのかについては、「詠歐陽行周事并序」に説明がある。長文だが、まずこの序文から見よう。

閩越之英、惟歐陽生。以能文擢第、爰始一命。食太学之祿、助成均之教、有庸績矣。我唐貞元年己卯歲、曾献書相府、論大事、風韻清雅、詞旨切直。会東方軍興、府県未暇慰薦。久之、倦游太原、還来帝京、卒官靈台。悲夫。生於單貧、以徇名故、心專勤儉、不識声色。及茲筮仕、未知洞房織腰之為

蠱惑。初抵太原、居大將軍宴。席上有妓。北方之尤者。屢目於生。生感悅之、留賞累月、以為燕婉之樂、尽在是矣。既而南轅、妓請同行。生曰、十目所視、不可不畏、辭焉、請待至都而來迎。許之。乃去。生竟以蹇連、不克如約、過期。命甲遣乘、密往迎妓。妓因積望成疾、不可為也。先死之夕、剪其雲髻、謂侍兒曰、所歡應訪我、当以髻為贖。甲至得之、以乘空歸、授髻於生。生為之慟怨、涉旬而生亦沒。則韓退之作何蕃書、所謂歐陽脩生者也。河南穆玄道訪予、常歎息其事。嗚呼、鍾愛於男女、素期效死、夫亦不蔽也。大凡以斷割、不為麗色所汨。豈若是乎。古樂府詩有華山畿、玉台新詠有廬江小吏。相死、類於此。暇日偶作詩、以繼之云。

閩越の英、惟れ歐陽生。文を能くするを以て擢第し、爰に始めて一命あり。太学の祿を食み、成均の教えを助け、庸績有り。我が唐の貞元の年己卯の歳、曾ねて書を相府に献じ、大事を論ずるに、風韻は清雅にして、詞旨は切直なり。会たま東方の軍興り、府県未だ慰薦するに暇あらず。之を久しくして、倦みて太原に遊び、帝京に還り来つて、官に靈台に卒す。悲しいかな。單貧に生まれ、名に徇うを以ての故に、心に勤儉を専らにして、声色を識らず。茲に筮仕するに及び、未だ洞房の織腰の蠱惑を為すを知らず。初めて太原に抵り、大將軍の宴に居る。席上に妓有り。北方の尤れたる者なり。屢しば生に目くばせず。生之に感悅し、留め賞すること累月、以えらく燕婉の樂しみを為すは、尽く是こに在りと。既にして南轅せんとし、妓同行せんことを請う。生曰く、十目の視る所は、畏れざるべからず、焉れより辞せん、請う都に至りて来迎するを待てと。之を許す。乃ち去る。生竟に蹇連たるを以て、克く約の如くせずして、期を過ぐ。甲に命じて乘を遣り、密かに往きて妓を迎えしむ。妓積望に因りて疾を成し、為すべからざるなり。死に先だつの夕べ、其の雲髻を剪り、侍兒に謂いて曰く、歡ぶ所應に我を訪ぬべし、当に髻を以て贖と為すべしと。甲至りて之を得、乘を以て空しく歸り、髻を生に授く。生之が為に慟怨し、旬を涉て生も亦没す。則ち韓退之の何蕃の書を作るは、所謂 歐陽脩生なる者な

り。河南の穆玄道 予を訪ね、常に其の事を歎息す。嗚呼、鍾愛の男女に於けるや、素より死に效るを期すること、夫れ亦 蔽われず。大凡 断割するを以て、麗色の泪わす所とは為らず。豈に是の若くならんや。古樂府詩に華山畿有り、玉台新詠に廬江の小吏有り。相い死すること、此れに類たり。暇日 偶たま詩を作り、以て之を継ぐと云う。

簡単に説明を加えておこう。「己卯」は、徳宗の貞元十五年（七九九）。相府（宰相の役所）に献じた書というのは、「上鄭相公書」（『歐陽行周文集』卷八）を指すのであろう。この宰相は、前年の七月に中書侍郎・同中書門下平章事に任じられた鄭余慶（七四六—八一〇）を指す。「東方の軍」とは、宣武節度使の後任をめぐって汴州（河南省開封市）で起こった混乱などを指している。「靈台」は、學宮。国子監を指す。韓愈の「具翁有懷」詩に、

塵埃紫陌春 塵埃 紫陌の春  
風雨靈台夜 風雨 靈台の夜

と云う。「何蕃書」とは、貞元十五年に書かれた韓愈の「太学生何蕃伝」を指す。韓愈はこの中に、四門助教であった歐陽詹の言葉を引いている。「華山畿」は、劉宋の少帝（在位四二二—四二四）の頃に作られた、呉歌・懊惱歌から派生した歌曲。『樂府詩集』卷四十六に引く『古今樂録』に見えている。南徐州の「一士子」と、雲陽の旅舎で見初めた年十八・九の女子との悲恋に基づくものであり、病死した「一士子」のあとを追って自殺した女子の歌である。「廬江の小吏」は、『玉台新詠』卷一に「古詩為焦仲卿妻作」として載せ、『樂府詩集』卷七十三には「焦仲卿妻」として載せられる樂府。周知のように、廬江府の小吏と妻劉氏の悲劇を歌う。「華山畿」の説話と同様、この作品においても、死後に二人は合葬される。

さて、孟簡の序文に述べられる歐陽詹の事跡は、太原の妓女との顛末を除

いて、ほぼ事実に基づいている。

ここで、歐陽詹の伝記資料について見ておこう。歐陽詹の死後に書かれたもので最も早いものは、貞元十六年（八〇〇）から翌年の冬の間にかかれた韓愈の「歐陽詹哀辞」であろう。この中から伝記的な事柄を述べた部分のみを引こう。

歐陽詹世居閩越、自詹已上、皆為閩越官、至州佐県令者、累累有焉。……今上初、故宰相常袞為福建諸州觀察使、治其地。袞以文辭進、有名於時、又作大官、臨莅其民。……詹于時独秀出、袞加敬愛、諸生皆推服。閩越之人拳進士繇詹始。建中・貞元間、余就食江南、未接人事、往往聞詹名閩巷間。詹之稱於江南也久。……八年春、遂与詹文辞同考試登第、始相識。自後詹歸閩中、余或在京師他处。……十五年冬、余以徐州從事朝正于京師、詹為国子監四門助教、將率其徒伏闕下、拳余為博士。会監有獄、不果上。觀其心、有益於余、將忘其身之賤而為之也。嗚呼、詹今其死矣。……詹之事業文章、李翱既為之伝、故作哀辞、以舒余哀、以伝于後、以遺其父母而解其悲哀、以卒詹志云。

歐陽詹は世よ閩越に居る、詹より已上、皆な閩越の官と為り、州佐・県令に至りし者、累累として焉れ有り。……今上の初め、故の宰相常袞 福建諸州觀察使と為り、其の地を治む。袞 文辞を以て進み、名 時に有り、又大官と作り、其の民に臨莅む。……詹 時に独り秀出し、袞 敬愛を加え、諸生 皆な推服す。閩越の人の進士に挙げらるるは詹より始まる。建中・貞元の間、余 江南に就食し、未だ人事に接せざるも、往往にして詹の名を閩巷の間に聞けり。詹の江南に称せらるるや久し。（貞元）八年春、遂に詹の文辞と考試を同じくして登第し、始めて相い識る。自後詹 閩中に歸り、余 或いは京師と他処とに在り。……十五年冬、余 徐州従事を以て京師に朝正するに、詹は国子監四門助教為り、將に其の徒を率いて闕下に伏せしめ、余を拳げて博士と為さんとす。会たま監に獄有り、上るを

果たさず。其の心を観るに、余を益せんとする有りて、將に其の身の賤なるを忘れて之を為さんとするなり。嗚呼、詹今其れ死せり。……詹の事業と文章と、李翱既に之が為に伝あり、故に哀辞を作りて、以て余の哀しみを舒べ、以て後に伝え、以て其の父母に遺りて其の悲哀を解き、以て詹の志を卒くさんとすと云う。

常袞（七二九—七八三）が歐陽詹を見出したのち、彼は貞元八年、韓愈とともに科挙に登第する。同年の進士については、後周・王定保撰『唐摭言』巻一の広文の条に、「貞元八年、歐陽詹第三人、李觀第五人。」とあるほかに、李絳、崔羣、王涯、馮宿らがいたことが知られる。また、この哀辞によれば、進士登第後に歐陽詹はいったん閩中に帰ったと言う。そのことは彼に、登第の翌年に書かれた「泉州刺史席公宴邑中赴拳秀才於東湖亭序」（『歐陽行周文集』巻九）があることから明らかである。ただし、韓愈は歐陽詹が太原に赴いたことには一切触れない。しかし、彼が郷里から再び北上して、国子監四門助教に任官する以前に太原に赴いたことも事実である。彼には「太原旅懷呈薛十八侍御齊十二奉礼」（『歐陽行周文集』巻二）、「初発太原途中寄太原所思」（同）、「和嚴長官秋日登太原龍興寺閣野望」（同）、「陪太原鄭行軍中丞登汾上閣、……輒書即事上答」（同）、「奉和太原鄭中丞登龍興寺閣」（同、巻三）「太原和嚴長官八月十五日夜西山童子上方翫月寄嚴中丞少尹」（同）などの詩があるからである。このうち、「初発太原途中寄太原所思」についてはのちに触れたい。鄭行軍中丞とは、鄭儋のこと。貞元十二・三年頃、河東節度使（治所は河南省太原市）の李説が病気になるると行軍司馬の彼が代わって軍政を総べ、李説の死後には節度使となつてゐる。また、嚴長官とは、嚴綬（七四六—八二二）のこと。『旧唐書』巻百四十六の本伝によれば、嚴綬はまづ鄭儋の後任の行軍司馬となり、その後、鄭儋が死ぬと、檢校工部尚書に太原の尹と御史大夫などを兼ねていた。したがって貞元十五年冬、国子監四門助教であつた歐陽詹が学生を引き連れて闕下に伏し、韓愈を博士に推薦しよ

うとしたときには、歐陽詹は太原から戻つて国子監四門助教となつてから、それほど時間は経っていないことになる。さらに、この哀辞が、歐陽詹の死因、あるいは死に至つた事情についてはまったく触れていないことにも留意しておきたい。なお、韓愈の言つてゐる、歐陽詹以前に閩の地が科挙登第者を出していないという記述は、神龍二年（七〇六）に登第した薛令之と貞元七年（七九一）に登第した林藻の例があることから誤りである。このことについては、すでに『登科記考』や馬其昶・馬茂元『韓昌黎文集校注』（上海古籍出版社、一九八六）などに指摘されている。また、貞元十四年の進士である李翱（七七二—八四一）が書いたという「伝」は、現存していない。ついで、歐陽詹の伝記資料として注目されるのは、李貽孫「故四門助教歐陽詹文集序」（『全唐文』巻五四四）である。李貽孫の名は新・旧『唐書』、『元和姓纂』、『登科記考』などには見えておらず、この「文集序」と会昌五年（八四五）に書かれた「夔州都督府記」のみが『全唐文』に収録されている。『全唐文』の小伝は彼について次のように言う。

貽孫、貞元時、官夔州刺史、累擢至諫議大夫、充宏文館學士、出為福建都團練觀察處置使兼御史中丞。

貽孫は、貞元の時、官は夔州刺史、累擢せられて諫議大夫に至り、宏文館學士に充てられ、出でて福建都團練觀察處置使兼御史中丞と為る。

「文集序」の前半部分は、「歐陽詹哀辞」よりも詳細だが内容はほぼ重なる。『歐陽行周文集』（四部叢刊）によつて、後半部分を引いておこう。この文章は『唐詩紀事』の歐陽詹の条の出典ともなつてゐる。

君之文新無所襲、才未嘗困。精於理、故言多周詳、切於情、故叙事重複。宜其司当代文柄、以變風雅、一命而卒、天其絕邪。……予冲幼之歲、即拜君於外家之門。大和中、予為福建團練副使日、其子儼自南安抵福州、進君

之旧文共十編首尾凡若干首、泣拝請序。予諾、其命矣。而詞竟未就。価微有文、又早死。大中六年、予又為觀察使、令訪其裔、因獲其孫曰澥、不可使歐陽氏之文遂絶其所伝也。為題其序亦以卒後嗣之願云。

君の文は新たにして襲う所無く、才未だ嘗て困くしまず。理に精なり、故に言は多く周詳す、情に切なり、故に叙事は重複す。宜しく其れ当代の文柄を司り、以て風雅を變ずべきに、一命ありて卒す、天其れ絶てるか。……予沖幼の歳、即ち君を外家の門に拝す。大和（八二七—八三五）中、予福建団練副使と為りし日、其の子の価南安より福州に抵り、君の旧文共に十編・首尾凡そ若干首を進め、泣拝して序を請う。予の諾うべなうは、其れ命なり。而るに詞は竟に未だ就ならず。価微しく文有るも、又早に死せり。大中六年（八五二）、予又觀察使と為り、其の裔を訪ねしめ、因りて其の孫の澥と曰うを獲たり、歐陽氏の文をして遂に其の伝わる所を絶えしむるべからず。為に其の序を題して亦以て後嗣の願いを卒とげんと云う。

この序文も歐陽詹の死に至る経緯について、李貽孫が歐陽詹の子の価に聞いていたかもしれないにもかかわらず、あるいはその「後嗣」たちに配慮したためか、まったく触れていない。また、歐陽詹は、正史においては、『旧唐書』に伝はなく、『新唐書』卷二百三に以下のように見えている。

歐陽詹字行周、泉州晉江人。其先皆為本州州佐・県令。閩越地肥衍、有山泉禽魚、雖能通文書吏事、不肯北宦。及常袞罷宰相為觀察使、始挾県郷秀民能文辞者、与為賓主鈞礼、觀游饗集必与、里人矜耀、故其俗稍相勸仕。初、詹与羅山甫同隱潘湖、往見袞、袞奇之。辞帰、泛舟飲餞。举進士、与韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・庾承宣聯第、皆天下選、時称竜虎榜。閩人第進士、自詹始。

詹事父母孝、与朋友信義。其文章切深、回復明辯。与愈友善。詹先為国

子監四門助教、率其徒伏闕下、拳愈博士。卒、年四十余。崔羣哭之甚、愈為詹哀辞、自書以遺羣。初、徐晦举進士不中、詹教称之、明年高第、仕為福建觀察使。語及詹、必流涕。

歐陽詹字は行周、泉州晉江の人。其の先は皆な本州の州佐・県令と為る。閩越は地肥衍にして、山泉・禽魚有り、能く文書・吏事に通ずと雖も、肯あて北に宦せず。常袞の宰相を罷めて觀察使と為るに及んで、始めて県郷の秀民の文辞を能くする者を挾とび、与とに賓主の鈞礼を為し、觀游・饗集には必ず与とにす、里人矜耀し、故に其の俗稍く相い勸仕す。初め、詹羅山甫と同じ潘湖に隠れ、往きて袞に見まゆ、袞之を奇とす。辞して帰らんとするに、舟を泛べて飲餞す。進士に挙げられ、韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・庾承宣と聯なり第するは、皆な天下の選なり、時に竜虎の榜と称す。閩人の進士に第するは、詹より始まる。

詹父母に事つかへて孝に、朋友と与とにして信義あり。其の文章は切深にして、回復するに明辯あり。愈と友善たり。詹先に国子監四門助教と為り、其の徒を率いて闕下に伏し、愈を博士に挙げんとす。卒するに、年四十余。崔羣之を哭すること甚し、愈詹の哀辞を為り、自ら書して以て羣に遺る。初め、徐晦は進士に挙げらるるも中あたらず、詹数しば之を称え、明年高第し、仕えて福建觀察使と為る。語詹に及べば、必ず流涕す。

屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』（四川大学出版社、一九九六）に引かれる陳景雲の注が、韓愈「歐陽詹哀辞」について、

李習之作詹伝、欧公云、已逸、而新史所載事迹、有出於哀辞外者、蓋宋子京好採摭小説故也。

李習之（李翱）の詹の伝を作るは、欧公云う、已に逸すと、而るに新史の載する所の事迹は、哀辞より出づる外の者有るは、蓋し宋子京（宋祁）好んで小説を採摭するが故なり。

と指摘しているように、『新唐書』の記述が、韓愈の哀辞と、引用はしなかつたが同じく彼の「題哀辞後」、及び孟簡の序文の範圍をほとんど出ていないか、むしろより簡潔になっていることが理解されよう。

次にかんがりの長篇であるが、ここで孟簡が歐陽詹と太原の妓女の死に触発され、「華山畿」と「古詩為焦仲卿妻作」を継承して作ったと述べている作品を読んでおこう。

有客西北逐 客有り西北に逐り

驅馬次太原 馬を驅りて太原に次る

太原有佳人 太原に佳人有り

神艷照行雲 神艷 行雲を照らし

座上轉橫波 座上 横波を転ず

流光注夫君 流光 夫君に注ぎ

夫君意蕩漾 夫君 意 蕩漾す

即日相交歡 即日 相い交歡し

定情非一詞 情を定むること一詞に非ず

結念誓青山 結念して青山を誓う

生死不更易 生死にも更易せず

中誠無間言 中誠 間言無し

此為太学徒 此れ太学の徒為り

彼屬北府官 彼 北府の官に属す

中夜欲相從 中夜 相い從わんと欲するも

巖城限軍門 巖城 軍門に限らる

白日欲同居 白日 同に居らんと欲するも

君畏仁人間 君は仁人の間を畏る

忽如隴頭水 忽ち隴頭の水の如く

坐作東西分 坐に東西の分かれを作す

驚離腸千結 離れに驚いて腸は千結し

滴淚眼双昏 涙を滴らせて眼は双つながら昏し

本達京師迴 本より京師に達して迴ると

賀期相追攀 賀びて相い追攀するを期す

宿約始乖阻 宿約 始めて乖阻し

彼憂既纏綿 彼の憂い既に纏綿たり

高髻若黃驪 高髻は黃驪の若く

危髻如玉蟬 危髻は玉蟬の如し

織手自整理 織手もて自ら整理し

剪刀斷其根 剪刀もて其の根を斷つ

柔情託侍兒 柔情 侍兒に託し

為我遺所歡 我が為に歡ぶ所に遺らんとす

所歡使者來 歡ぶ所の使者來り

侍兒因復前 侍兒 因りて復た前む

投淚取遺寄 涙を投いて遺寄を取り

深誠祈為伝 深誠 為に伝わらんことを祈る

封來贈君子 封じ來つて君子に贈る

願言慰窮泉 願わくば言に窮泉を慰めん

使者迴復命 使者 迴りて復命し

遲遲蓄悲酸 遲遲として悲酸を蓄う

詹生喜言旋 詹生 言に旋るを喜び

倒屣走迎門 屣を倒にして走りて門に迎う

長跪聽未畢 長跪して聽くこと未だ畢わらざるに

驚傷涕漣漣 驚き傷みて涕漣漣たり

不飲亦不食 飲まず亦食らわず

哀心百千端 哀心 百千端

襟情一夕空 襟情 一夕に空し

清爽日日残 清爽 日に残る

哀哉浩然氣 哀しいかな浩然の氣

潰散帰化元 潰散して化元に帰す

短生雖別離 短生 別離すと雖も

長夜無阻難 長夜 阻難無し

双魂終会合 双魂 終に会合し

兩劍遂蜿蜒 兩劍 遂に蜿蜒たり

丈夫早通脱 丈夫は早に通脱なり

巧笑安能干 巧笑も安んぞ能く干さん

防身本苦節 身を防るは本より苦節

一去何由還 一たび去きて何に由りてか還らん

後生莫沈迷 後生 沈迷すること莫かれ

沈迷喪其真 沈迷すれば其の真を喪わん

この詩が歐陽詹「初発太原途中寄太原所思」詩を発想の契機としてい  
とは間違いないかろう。

四

次に見逃してはならないのは、黄璞の「歐陽行周伝」(『全唐文』卷八一七)である。黄璞の単独の伝は新・旧『唐書』にはなく、『新唐書』卷五十八、芸文志二に「閩川名士伝一卷」が著録されて、「字紹山、大順中進士第。」とあり、同じく卷六十、芸文志四には、「霧居士」なる著述「十卷」が著録されるほか、同じく『新唐書』卷二百二十五下、黄巢伝に、乾符六年(八七八)、黄巢の軍が広州に侵攻する途次のこととして、次のような記事が見えるのみである。

僂路圉福州、觀察使韋岫戰不勝、棄城遁、賊入之、焚室廬、殺人如藪。過崇文館校書郎黄璞家、令曰、此儒者、滅炬弗焚。

僂路して福州を圉む、觀察使韋岫 戦いて勝たず、城を棄てて遁げ、賊之に入る、室廬を焚き、人を殺すこと藪の如し。崇文館校書郎黄璞の家を過ぐるに、令して曰く、此れ儒者なり、炬を滅して焚かざれと。

この記事から、黄璞が福州の人であったこと(『全唐文』の小伝は、閩県の人とする)と、崇文館校書郎であったこと、さらには「儒者」として尊崇されていたことがわかる。ただし、『登科記考』卷二十四によれば、彼が進士に登第したのは、昭宗の大順二年(八九一)のことである。彼には詩は残らないが、「歐陽行周伝」のほか、同じく『全唐文』卷八百十七に、「林孝子伝」と「王郎中伝」が、『唐文拾遺』卷三十三に、「觀察使檢校司徒兼御史大夫陳巖墓誌」が収録されている。

さて、黄璞の「歐陽行周伝」を見よう。この文章は、『全唐文』に見えるものと、『太平広記』卷二百七十四、情感の部に、『閩川名士伝』を出典として引かれるものとは若干の異同があるが、ここは『太平広記』から引用する。

歐陽詹字行周、泉州晉江人。弱冠能属文、天縱浩汗。貞元年、登進士第。畢闕試、薄遊太原、於棗籍中、因有所悦、情甚相得。及歸、乃与之盟曰、至都、当相迎耳。即灑泣而別。仍贈之詩曰。

歐陽詹 字は行周、泉州晉江の人。弱冠にして能く文を属り、天縱・浩汗なり。貞元の年、進士の第に登る。闕試を畢えて、太原に薄遊し、棗籍の中に、因りて悦ぶ所有り、情 甚だ相い得たり。帰らんとするに及び、乃ち之と盟いて曰く、都に至りて、当に相い迎うべきのみと。即ち泣を灑ぎて別る。仍ち之に詩を贈りて曰く、

驅馬漸覺遠 馬を驅りて漸く遠きを覺ゆ

迴頭長路塵 頭を迴らす長路の塵  
 高城已不見 高城 已に見えず

況復城中人 況や復た城中の人をや

去意既未甘 去るものの意は既に未だ甘んぜず

居情諒多辛 居るものの情は諒に辛きこと多からん

五原東北晋 五原 東北の晋

千里西南秦 千里 西南の秦

一履不出門 一履 門を出でず

親車無停輪 親車 輪を停むる無し

流萍与繫匏 流萍と繫匏と

早晚期相親 早晚 相い親しむことを期せんや

前述したようにここに引かれる詩は、『歐陽行周文集』卷二に、「初発太原途中寄太原所思」として見えるものであり、一部これによって改めた。この詩が、その後の展開の重要な契機となっていることは間違いない。「歐陽行周伝」の後半を見ていこう。

尋除国子四門助教、住京。籍中者思之不已。経年得疾且甚。乃危粧引髻、刃而匣之、顧謂女弟曰、吾其死矣。苟欧陽生使至、可以是为信。又遺之詩曰、……。絶筆而逝。及詹使至、女弟如言。径持帰京、具白其事。詹啓函閱之、又見其詩、一慟而卒。故孟簡賦詩哭之。序曰、……。

尋いで国子四門助教に除せられ、京に住まる。籍中の者 之を思いて已まず。年を経て疾を得て且つ甚だし。乃ち危粧して髻を引き、刃りて之を匣にし、顧みて女弟に謂いて曰く、吾 其れ死せん。苟くも欧陽生の使いに至らば、是れを以て信と為すべしと。又 之に詩を遺りて曰く、……。筆を絶ちて逝く。詹の使いの至るに及び、女弟 言の如くにす。徑ちに持ちて京に帰り、具に其の事を白ぐ。詹 函を啓きて之を閲し、又 其の詩を

見、一たび慟して卒す。故に孟簡 詩を賦して之を哭す。序に曰く、……。

このあとに孟簡の「詠欧陽行周事并序」が引用されているが、すでに見たので省略する。さて、この「欧陽行周伝」において注意しておきたい点はいくつかある。第一に、冒頭に引いたので省略したが、太原の妓女の詩がここに初めて登場することである。第二に、妓女と欧陽詹の死の経緯について、孟簡の序文では、妓女について「死に先だつの夕べ」に、雲髻を切つて侍見に託した、とのみあったのが、黄璞の伝においては「吾 其れ死せん。……。筆を絶ちて逝く。」とあつて、死のごく直前に詩を書いたかのように誇張がなされている。また、欧陽詹についても、孟簡の序文では「生 之が為に慟怨し、旬を渉て生も亦没す。」とあつて、遺髪を見た欧陽詹が、それから十日を経て亡くなったとするのに、黄璞の伝では、「其の詩を見、一たび慟して卒す。」とするなど、臨終の描写がいつそう劇的になっている。

それでは誰が太原の妓の詩を創作したのであろうか。推測の域を出ないが、孟簡の序に詩が見えなかった以上、黄璞が『閩川名士伝』を撰するに際して資料とした文献の作者か、あるいは黄璞自身がこれを創作したと考えざるを得ないのである。

唐代の欧陽詹に関する資料として、最後に范攄の『雲溪友議』卷上、南海非の条を見ておこう。ただし、『雲溪友議』を編んだ范攄については、『新唐書』卷五十九、芸文志三に、「范攄雲溪友議三卷 咸通時、自称五雲溪人。」(范攄の雲溪友議三卷 咸通の時、自ら五雲溪人と称す。)とあるのが知られるのみであつて執筆時期は明確でなく、黄璞の伝が撰せられる以前の著作である可能性もある。『雲溪友議』に載せられる話柄のあらましを紹介しておこう。

成都にいた、大和(八二七—八三五)初めの進士である房千里、字は鵠拳は、かつて進士の章滂なる者が南海から携えてきた趙氏を妾としていた

が、都に戻る際に趙氏といったん別れ、「中秋」に会うことを約束した。襄州まで来たときに、番禺（広東省広州市）に赴こうとしていた許渾と出遇い、妾に「情意」を伝えることを依頼した。ところが、許渾が到着して人を遣つて訪ねると趙氏は韋滂のものになつていた。これを報ずる許渾の詩を読んだ房千里は、「幾有歐陽四門詹太原之喪。」（幾どほとん歐陽四門詹の太原の喪のごとき有り。）という情況であつた。

この一文には原注があつて、「歐陽太原亡姫之事、孟簡尚書已有序詩述之矣。」（歐陽の太原亡姫の事は、孟簡尚書 已に序詩有りて之を述ぶ。）と指摘している。この記述からすれば、咸通時期（八六〇—八七四）に活動した范攄が『雲溪友議』を編んだ時には、すでに歐陽詹と太原の妓女との逸話は広く知られていたであろう。

## 五

さて、歐陽詹の事跡はこれまで見てきた資料以外にも、李肇『唐国史補』、王定保『唐摭言』、王彙『唐語林』などにも散見する。しかし、これらは歐陽詹の進士登第にまつわる逸話を取り上げるに過ぎない。太原の妓女との逸話がもつぱら取り上げられるようになるのは、宋・明代の詩話類に至つてからである。

まず、尤袤（一一二七—一一九四）の『全唐詩話』巻二は、「途中寄太原所思」詩と太原の妓女の「詩」を引き、孟簡の序文にも言及するが、文章は黄璞の「欧陽行周伝」とほぼ同様である。<sup>①</sup>さらに、葛立方（？—一一六四）の『韻語陽秋』巻十九は、次のように言う。

韓退之作欧陽詹哀詞、言其事父母至孝。又曰、讀其書、知其於慈孝最隆。

又曰、詹舍朝夕父母之養而來京師、其心將以有得而歸、為父母榮也。及觀

閩川名士伝載、詹溺太原之妓、未及迎婦、而有京師之行。既愆期而妓病革、

將死、割髻付女奴以授詹。詹一見大慟、亦卒。集中載初發太原寄所思詩、所謂高城已不見、況復城中人者、乃其人也。豈退之以同榜之故、而固護其短、飾詞以解人之疑乎。嗚呼、詹能義何蕃之不從乱、而不能割愛於一婦人、能薦韓愈之賢、而不能以貽親憂為念、殆有所蔽而然也。如樂津北樓絶句与聞唱涼州詩、皆賦情不薄、有以知其享年之不長也。

韓退之 欧陽詹哀詞を作り、其の父母に事えて至孝なるを言う。又曰く、其の書を讀みて、其の慈孝に於けるや最も隆なるを知ると。又曰く、詹朝夕の父母の養を捨てて京師に来る、其の心 將に以て得て歸り、父母の榮と為さんとする有るなりと。閩川名士伝の載するを觀るに及んでは、詹太原の妓に溺れ、未だ迎婦するに及ばずして、京師の行有り。既に期を愆ちて妓の病革あらたまる、將に死せんとして、髻を割き女奴に付して以て詹に授く、詹 一たび見て大いに慟し、亦 卒す。集中に初めて太原を發して思う所に寄する詩を載す、所謂 高城 已に見えず、況や復た城中の人をや、とは、乃ち其の人なり。豈に退之 同榜の故を以て、固もとより其の短を護り、詞を飾りて以て人の疑いを解かんや。嗚呼、詹 能く何蕃の乱に従わざるを義とし、而して愛しみを一婦人に割く能わざらんや、能く韓愈の賢を薦め、而して親に憂いを貽たづすを以て念と為す能わざらんや、殆ど蔽わるる所有りて然るなり。樂津北樓絶句と涼州を唱うを聞きく詩の如きは、皆な情を賦して薄からず、以て其の享年の長からざる有るを知るなり。

葛立方は、正義感と孝行で聞こえた欧陽詹の判断力の欠如を嘆き、いつぱうではそのひたむきさを惜しんでいるが、彼もまた欧陽詹の死は太原の妓女に起因すると信じていたのである。その後も、欧陽詹と太原の妓の逸話は記録され続けてゆく。逸話が伝播してゆくうえで、計有功『唐詩紀事』の果たした役割も大きかったであろう。

文人が妓女と親交を結び、それが不幸な結末に終わることは、唐代においてもしばしば見られたことに違いない。これを歐陽詹と太原の妓女に当てはめて考えみるならば、歐陽詹がまだ任官していない時期に太原に行き、そこで妓女と出会ったことは事実であり、また、彼が四十代で亡くなったことも事実である。しかし、妓女のいわゆる「絶命詩」は、これまで見てきた通り、彼女の真作であるとは考えられないし、歐陽詹が妓女の遺髪を見て、悲しみの余り時をおかずに亡くなったとすることも根拠がない<sup>13</sup>。このような逸話が發生する発端は歐陽詹の「初発太原途中寄太原所思」にあり、これが孟簡の手によつて一篇の物語に仕立てられ、さらに、黄璞かまたは黄璞に先立つ何者かの手によつて太原の妓の詩が創作されて附加されたというのが真相であろう。その際に手がかりとなった詩があつたことを、明の楊慎（一四八八—一五五九）が指摘している。『升菴詩話』巻五、「唐詩不厭同」の条には、「唐人詩句、不厭雷同、絶句尤多。」（唐人の詩句、雷同を厭わざるは、絶句尤も多し。）と述べたあとで、次のような崔鶯鶯の詩（元稹「鶯鶯伝」所引。『全唐詩』巻八〇〇には「寄詩」として見える）を引いている。

自從消瘦減容光 消瘦 容光を減じて自從り  
 万転千迴懶下牀 万転 千迴 牀より下るに懶し  
 不為傍人羞不起 傍人の為に羞じて起たざるにあらざる  
 因郎憔悴却羞郎 郎に因りて憔悴し却つて郎に羞す

この詩は妓女の恋心を詠じたものであるが、あるいはこの詩と孟簡の「歐陽行周事」詩とが結びついて、太原の妓女の詩が創作される基礎となったものであろう。〔一〇〇〇・一・一二稿〕

1 歐陽詹の生没年について、仮にこのように記したが、本論中でも触れるように、彼と同年の進士である韓愈（七六八—八二四）の「歐陽生哀辞」には、貞元一五年（七九九）の冬に歐陽詹が韓愈を国子博士に推挽したことは言及するものの、同一七年冬に韓愈が四門博士となったことには触れないところから、歐陽詹が没したのは、貞元一六年から同一七年冬までの間と考えられる。また、彼が「年四十餘」で卒したことは『新唐書』巻二〇三の本伝に記されている。したがって、この生年については訂正されなければならない。植木久行「唐代作家疑年録」(9) — 歐陽詹・郭元振・陸羽 —（弘前大学人文学部「文経論叢」三二—三三、人文科学篇一六、一九九六）では、この点に関して詳細な検討がなされている。また、いちいち明示しなかったが、植木論文は多くの資料を博搜して参考になる点が多く、多大の学恩を蒙った。

2 『唐詩紀事』巻三五、歐陽詹の条には、次のように言う。

途中寄太原所思詩云、……或曰、詹遊太原、悦一妓。將別、約至都相迎、故有早晚期相親之句。妓思之不已、得疾且甚。乃刃髻藏之、謂女弟曰、歐陽生至、可以為信。又作詩曰、……絶筆而逝。及詹至、如其言示之。詹啓函、一慟而卒。

「途中太原の所思に寄する詩」に云う、……或ひと曰く、詹太原に遊び、一妓を悦ぶ。將に別れんとして、都に至りて相い迎えんことを約す、故に「早晚相親しまんことを期す」の句有り。妓、之を思いて已まず、疾を得て且つ甚だし。乃ち髻を刃りて之を藏し、女弟に謂いて曰く、歐陽生の至らば、以て信と為すべしと。又詩を作りて曰く、……筆を絶ちて逝く。詹の至るに及び、其の言の如く之を示す。詹、函を啓き、一たび慟して卒す。

3 後に引く資料からも明らかのように、太原の妓女は、いわゆる官妓、または營妓だったと考えられる。これについて石田幹之助「長安の歌妓（上）」

〔増訂 長安の春〕平凡社東洋文庫九一、一九六七）は次のように述べている。

次に官妓とも申すべきものがありました。州郡や藩鎮の衙内に置かれ、刺史や節度使の如き地方長官の公私の宴会などに侍するのを職としたものでありまして、官妓と云ふのもこの類のものであります。これらは之に主たる文武の地方長官が勝手に処理することを得たものでありまして長官が任期満ちて郷に帰る時、また甲地を去つて乙地に転ずる時など、随意にそのうちの尤物を選んで行を共にすることも出来ましたし、隣郡から請求があれば之を貸し与へることは勿論、縁あつて之を欲するものがあれば長官の考へ次第で自由に籍を解いて之に贈ることなどは習見のことでありました。ただ官妓が身を退いて民庶に嫁せんとする時には、地方長官の承諾許可を必要としたことは当然であります。

また、斎藤茂『妓女と中国文人』（東方選書三五、二〇〇〇）、第一章「妓女の起り」中の「官妓」の項は、「官妓と士大夫のロマンスの一例」として、『閩川名士伝』から歐陽詹と太原の妓女の逸話を引いている。本書からも多大の学恩を蒙った。

4 横山伊勢雄「苦吟派の詩—孟郊試論—」（大塚漢文学会「漢文学会会報」四一、一九八三）には、孟簡に言及する部分がある。孟簡は孟郊の従叔にあたる。

5 この点に関して、諸田龍美「『歐陽詹』事件から見た『鶯鶯伝』の新解釈—中唐の『尤物論』を巡って—」（『日本中国学会報』四九集、一九九七）は、「孟簡は歐陽詹に先立つこと一年、貞元七年に科挙に及第し、同年の進士には閩出身の林藻がいた。欧陽詹とは同郷の知己であったこの林藻を介して、孟簡は歐陽詹を知ったのであろう。だとすれば欧陽詹の死去は孟簡にとって、十年來の友人を失ったことを意味した。従つて、彼は衷心から、これを悼んだのである。」と指摘している。本論文からも多大の

学恩を蒙った。

6 『樂府詩集』に引く説話は、『太平広記』卷一六一、感応一、南徐士人の条に、撰者未詳の『系蒙』を出典として引かれる一文とほぼ同じである。次に歌詞を掲げておく。

華山畿 華山の畿

君既為儂死 君 既に儂の為に死す

独活為誰施 独り活くも誰が為にか施さん

飲若見憐時 飲 若し憐れまるる時あらば

棺木為儂開 棺木 儂の為に開け

また、増田清秀『樂府の歴史的研究』（創文社、一九七五）第六章一三〇頁、「呉歌にまつわる説話」は、「呉歌のうち、最古の『子夜歌』を始め、東晋及び宋初に発生した歌曲に、説話がまといついている。……しからば、説話がどうして歌曲にまといついたか。換言すれば、歌曲が発生または流行した要因は何であるか。それを探り出すと、次の五つを数えることができる。すなわち、一つは、歌辞が本で説話の生まれたもの。二つは、有名人の女性関係。三つは、逆臣の行動。四つは、王室の噂。五つは、民間のある情死事件である。」と述べ、「華山畿」を第五の項に分類している。

7 前掲諸田論文は、『太平広記』に引かれるこの故事について、「『欧陽詹』故事は、二つの部分に大別できる。一つは晩唐の黄璞が記した部分であり、今一つは、中唐の孟簡による部分である。……黄璞所記部は誤聞や脚色を含み、信憑性に疑問が残る。」と指摘する。

8 詩の読みについては前掲「妓女と中国文人」を参照した。なお同書は大意も付している。

9 ただし、この『新唐書』芸文志の記述について、『四庫全書総目提要』卷一四〇、小説家類一の『雲溪友議』の条は、次のように述べている。始末未詳。唐書芸文志註稱為感通時人。而書中李涉贈盜詩一条、稱

乾符己丑歲客於雲川、親見李博士手蹟。考乾符元年為甲午、六年為己亥、次年庚子改元広明、中間無己丑。己丑実為咸通十年。疑書中或誤咸通為乾符、否則誤己亥為己丑。然総之僖宗時人矣。

始末 未だ詳らかならず。唐書芸文志の註に稱して咸通の時の人と為す。而るに書中の李涉贈盜詩の一条に、乾符己丑の歲 雲川に客たり、親しく李博士の手蹟を見る、と稱す。考うるに乾符元年は甲午為り、六年は己亥為り、次年の庚子 広明と改元し、中間に己丑無し。己丑は実は咸通十年為り。疑うらくは書中或いは咸通を誤りて乾符と為すか、否しからざれば則ち己亥を誤りて己丑と為すのみ。然らば之を総ずるに僖宗の時の人ならん。

僖宗は咸通一四年（八七三）に即位し、文徳元年（八八八）に没している。

10 『雲溪友議』は「渾寄房秀才詩曰、……」と言うが、『全唐詩』卷八〇〇には「趙氏」の「寄情」詩として載せ、題下注に「一作許渾代作」と言う。またこの詩については、李立朴『許渾研究』（貴州人民出版社、一九九四）に考証がある。

11 ただし、「途中寄太原所思」詩の第七句を「万里東北晋」に作り、妓女の詩の結句を、「為奴開取鏤金箱」に作る。

12 それぞれ、七絶「樂津店北陂」（『歐陽行周文集』卷二）と、五律「聞鄰舍唱涼州有所思」（同）を指す。ともに別れた女性を想う内容となっている。

13 欧陽詹の死については本稿で取り上げた資料のほかにも、陳振孫『直齋書錄解題』卷一六をはじめ、『四庫全書總目提要』卷一五〇、余嘉錫『四庫提要弁證』卷二〇、胡玉縉撰・王欣夫『四庫全書總目提要補正』卷四四などに多くの指摘がなされている。しかし、いずれも太原の妓女の詩には論及しない。